研究代表者： 遠藤 啓吾（群馬大学医学部　放射線診断核医学）　　研究番号：H19-臨床試験-一般-016

類骨骨腫に対する経皮的ラジオ波凝固療法に関する研究

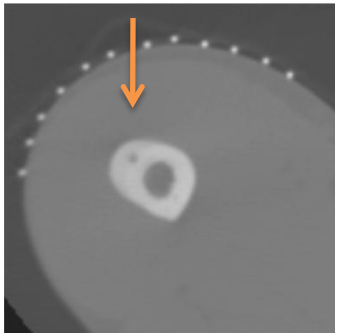
研究目的

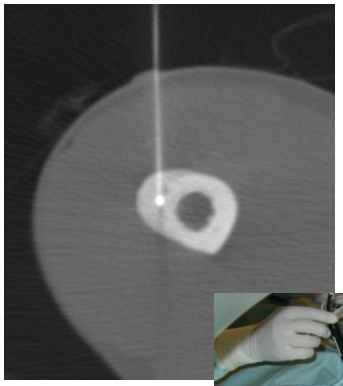
類骨骨腫は小児や若年成人に発生する**良性の骨腫瘍**です。徐々に進行する痛みが主な訴えですが、特に夜間に強くなります。これまでこの病気に対する治療法は外科的に腫瘍を切除することが第一でしたが、最近欧米ではCTなどの画像を見ながら小さな病変に細い針を刺してラジオ波(電磁波の一種)によって焼灼(しょうしゃく)する、**経皮的ラジオ波凝固療法**が主流となっています。

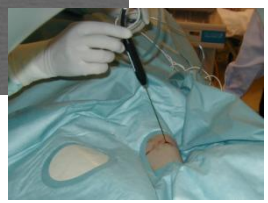
この研究では、新しい低侵襲治療法である類骨骨腫に対するラジオ波凝固療法（国内では保険収載されていません）を、承認された複数の施設で、この治療に同意された患者さんに行い、その結果を検討することで、**この治療法の安全性と有効性を明らかにする**ことを目的にしています。

実際の治療

この治療にはラジオ波を発生する装置(左上)とラジオ波を病変に伝える針(左下)が使用されます。
国内では肝臓の病気に使用される装置だけが保険で認められているため、本研究でも肝臓用の装置を使用しています。







類骨骨腫の本態は左上の図のような骨内にある**1.5cm以下の小病変**(矢印)です。CTなどの画像装置を見ながら針をさす(左下)ことで適格に病変に針を刺すことができ、**外科手術よりも簡単に**治療することができます。皮膚に残る傷跡も1cm以下(治療後は更に目立たなくなります)で非常に小さいものです。

研究成果

この研究では、国内では普及していない、**類骨骨腫に対するラジオ波治療の安全性と治療効果を確認**するための試験を計画しました。複数の施設の放射線診断専門医やインターベンショナルラジオロジー*(IVR)専門医を中心としたグループである、**日本腫瘍IVR研究グループ(JIVROSG)で試験の計画を作成**しました。群馬大学医学部附属病院を中心とした11施設で平成20年4月より本治療の臨床試験が開始され、平成22年2月に予定された21人の患者さんへの治療が終了しました。これまでに、**この治療による強い副作用や合併症を生じたという報告はありませんでした。**

期待される成果

これまでに欧米などで発表された論文では、この治療法の**治療効果は76～100%**で、副作用の発生率も3%程度とされています。しかし、この治療法の本格的な臨床試験は世界でも例が無く、この研究により**世界で初めてこの治療法の正確な治療効果が判明する**ことになります。

＊インターベンショナルラジオロジー(IVR)とは

レントゲン、CT、超音波などの画像装置を見ながら、カテーテル・針などで侵襲の少ない治療を行う新しい治療法です。

今後の展望

この研究により、類骨骨腫に対するラジオ波治療の安全性と治療効果が判明することにより、現時点では認められていない、この治療に使う治療装置や治療法自体の保険適応が拡大される可能性があります。

社会に与える影響

類骨骨腫の患者さんは主に10歳以下の子供や若年成人ですが、病気の名前も一般的ではないため成長痛などと間違われて診断されている場合があります。類骨骨腫と診断されても国内では外科的に腫瘍を切除する方法か鎮痛剤を飲み続ける方法の選択肢しかありません。この研究により新しいIVR治療法であるラジオ波凝固療法が普及し保険による治療が可能となれば、**欧米と同様に日帰り(長くても2泊3日程度)でこの病気を治す**こともできるようになります。

この研究により、類骨骨腫に悩む患者さんやその家族の負担を大きく減らすことができると考えられます。